

《中国人家族のいる雪景色》
—もうひとつの「中国絵画」—

福岡アジア美術館 堀川 理沙

「チャイナ・トレード・ペインティング」は、18世紀中頃から19世紀中頃にかけて、当時、清国で唯一対外貿易に開かれていた広東港を中心に、中国人画工が西洋人向けに制作した輸出用絵画の総称で、近代黎明期特有の東西の技法や美意識の混在したハイブリッドな魅力を持つ作品群である。福岡アジア美術館では、現在チャイナ・トレード・ペインティングを24点所蔵するが、その中に《中国人家族のいる雪景色》(1810年頃カ、75.2x110.3cm)がある。これは、満州族と思われる家族が積雪の山野を散策する風景を描いた油彩画で、元はイギリスの個人所蔵とされるものである。管見の限りで、雪景色を描いたチャイナ・トレード・ペインティングは、イギリス、オランダ、香港など各地のコレクションに20点が確認される。中国風俗をエキゾチックに誇張したチャイナ・トレード・ペインティングが数多く制作された中、北方の荒涼とした雪景色を描いた作品はいささか特異に映る。

今日、チャイナ・トレード・ペインティングが主に「貿易画(Export Painting)」や「歴史画(Historical Picture)」として分類・展示されていることが端的に示すように、従来の研究では、造形様式的な側面からの検討はもちろん、中国絵画史の文脈で論じられることも殆どなかった。特に雪景色作品は、他の画題と比べて比較的現存作品が少ない上に、制作時期にあたる1800年前後の文献や記録が希少であることから、作例の概括的な整理さえ進められていないのが現状である。

本発表は、《中国人家族のいる雪景色》の詳細な検討を通して、作品を「中国美術史」との関連性の中に位置づけることを目的とする。具体的な手順として、まず、《中国人家族のいる雪景色》を中心に雪景色作品を概観して、その造形的特徴を整理する。そして、西洋絵画の材料や視点を取り入れながらも、空の表現、構図、陰影処理、雪の表現法、描かれた風俗などに、中国絵画の伝統的な表現が豊かに展開していることを指摘し、特にそれが《中国人家族のいる雪景色》に顕著に表れていることを明らかにする。以上をふまえた上で、作品が制作された1800年前後という特定の文化社会的背景を考慮し、受容者である西洋人の「中国絵画」に対する認識を示した史料を参考に、当時の文脈において、チャイナ・トレード・ペインティングが、たんなるお土産画ではなく、受け手側にどのように受け止められていたのかを考察し、作品の多面的な解釈を試みたい。